

1930年代の世界不況と西スマトラ経済(Ⅱ)

—— 第2部 不況に対する住民の反応 ——

おお き あきら
大 木 昌

第1部 住民経済への影響

序 言

- I 貿易と商業
- II 輸出作物栽培への影響
- III 住民所得への影響

まとめ (以上、前号)

第2部 不況に対する住民の反応

問題の所在

- I 現金の調達
——金の売却と金融——
- II 食糧の増産
- III ミナンカバウ商人の対応
- IV 不況に対する社会的反応

結 論 (以上、本号)

問題の所在

本稿の第1部で筆者は不況が住民経済に与えた影響を、貿易と商業、輸出作物栽培、住民の所得の3点から検討した。この第2部は、住民の不況への対応を検討しよう。Iの主要なテーマは、不況による所得(現金収入)の減少という状況下で住民は当座に最低限必要な現金をいかにして確保したのか、という問題である。これについてIでは各種金融機関からの借り入れ、金の売却状況が論じられる。しかし金融にせよ金の売却にせよ、それらの行為は差し迫った手持ち現金の不足を補うための短期的な対応策であったということが出来る。筆者は、長期的観点からみて住民が不況下の経済的困難を克服しようとした努力の中で食糧の増産が最も重要であったと考える。というのも、

不況期には輸出作物栽培からの収入が激減してしまい、以前のように食糧をこの収入で購入することができなくなったからである。住民は現金支出を抑え、生活を維持するために食糧を増産する必要があった。II前半は、1930~38年の期間に西スマトラ住民は米作を犠牲にして輸出作物栽培を拡大したというギアーツ(C. Geertz)の見解を批判的に検討しつつ、米の増産がいかにして行なわれたかを論ずる。そして後半では、米以外の食糧(キャベツ、馬鈴薯など)生産が飛躍的に増大した過程が扱われる。これら野菜の栽培は、当初米を補う自給用食糧生産として1930年代初頭に大規模に始められたが、まもなくその生産量の大半がシンガポールその他へ輸出されるようになった、という点で特筆すべき住民の積極的対応を示している。IIIは、インドネシア諸種族の中でも特に商業活動の領域で重要な役割を果たしていたミナンカバウ商人が不況の困難な状況にいかに対処しようとしたかを、華僑との競争の克服という点を中心に扱う。最後にIVは、不況に対する社会的反応を簡単に述べる。

I 現金の調達

——金の売却と金融——

不況期に入って住民ができるかぎり現金支出を抑えて節約に努力したことはいうまでもない。しかし、いかに節約しても租税の支払いやその他最

低限度の生活必需品を購入するためある程度の現金を用意しなければならなかった。これら緊急に必要な現金を住民はいかにして調達したのだろうか。本節ではまず資産の処分と金融に焦点をあててこの問題を検討してみよう。

西スマトラにかぎらず、住民が蓄財をする最も一般的な方法は金を蓄えることであった。金は金貨として、また種々の装飾品として保有されていた^(注1)。1929年の大恐慌は輸出作物価格の下落、したがって所得の減少をもたらしたが、住民は緊急に必要な現金の一部をさしあたり手持ちの金を入質ないし売却することによって補おうとした。第10表は1930年から1938年までに西スマトラからパタビア（現ジャカルタ）に売却された金の額を示したものである。この中には入質した金が「質流れ」となって売却された分も含まれている。第10表から分るように金の売却は1930年から1932年まで急激に増え続け、1933年から再び減少し始めた。1930年に金の売却が増大した時、西スマトラ政庁は、住民の金保有量は1930年の売却で大幅に減少したため翌年には金の売却が減少するであろうと予想していた^(注2)。しかし、1931年の金の売却は減少するどころか前年に比べて40%も増加したのである。ところで金の売却は住民経済の中でどれほどの重要性を占めていたのだろうか。これを金の売却が最も多かった1932年についてみると、この年の対外、域内（蘭印内部）貿易の総合収支は170万ギルダの輸入超過であったのに対して金の売却は200万ギルダであった^(注3)。すなわち、西スマトラの住民は州内で調達できない物資の輸入をそれまでに蓄積していた金の売却によって賄ったことになる。しかし金の売却は1932年以降減少を続け、1937年以降それは激減してしまった。恐らく住民の金保有は長期の不況過程で涸渇してし

第10表 西スマトラにおける金の売却

(単位: 100万ギルダ)

年	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
金額	0.5	0.7	2.0	1.3	0.75	1.0	1.0	0.21	0.28

(出所) *Verslag van de Kamer van Koophandel en Nijverheid 1930 (Verslag Padang)*, Padang, Volharding, 1931, blz. 10; *V. P. 1938*, blz. 10.

まったのであろう^(注4)。

金の売却とは過去の蓄積を処分することにほかならないが、緊急に必要な現金は各種金融機関からの借り入れによっても、入質によっても調達することはできた。庶民にとって身近な金融機関であった公営質屋から貸し出された金額の推移は金の売却のそれと同じ動きを示し、1932年を境に年間平均250万ギルダから1933年以降の170万ギルダへ大幅に落ち込んだ。また、大恐慌以前にはたとえ入質しても住民は通常比較的短期間に返済して入質物件を取り戻していたが大恐慌以降になると返済期間が長くなっただけでなく返済不能のため「質流れ」となってしまふ事例が多くなってきた。たとえば1930年の公営質屋取引の状況を見ると、返済不能のまま「質流れ」となってしまった事例は1929年のそれと比べて倍増したのである^(注5)。こうして、不況が進行するにつれて金をも含む高価な入質物件は住民の手から次第に離れていってしまった。かかる現象は入質1件当たりの貸付額が1929年の6ギルダから1938年の3.2ギルダへ半減してしまったことに如実に現われている^(注6)。以上みたごとく、入質行為は返済を前提とした一時的金融から財産処分という性格を徐々に強め、それによって緊急に必要な現金を入手しようとする住民の一つの対応行為であったと考えることができる。

公営質屋は不動産を扱わなかったので、土地の入質はもっぱら住民相互の間で行なわれた。土地

の中でも入質されたのは通常水田であった。しかし住民の間で行なわれた土地の入質は慣習法に基づいて行なわれたため、これについての資料はきわめて得にくく実態が分りにくい。ただし、米価の下落につれて水田の入質価値も下落したことだけは確かである。たとえばアラハン・パンジャン地方では1000スカット(1 sukat=12.6リッター)の粳米を産する水田の入質価格は1928~30年に300~400ギルダーであったが1936年には100~150ギルダーへと半分以下に落ち込んでいった(注7)。現在のところ不況期に土地の入質が増えたのか減ったのかは分らない。次に銀行からの借り入れについて述べよう。

西スマトラには1910年代の初頭以降政庁の指導のもとに「村落銀行」(Lumbung Pitih)が各村落に、「地方銀行」(Locale Bank)が各地方ごとに設立され、これらは1925年に西スマトラにおける中央銀行として「ミナンカバウ庶民銀行」に統轄されるようになっていた(注8)。これらの銀行からの貸付額は1920年代の好況期には農園の拡大、商工業の設立・運用資金、あるいは高価な輸入品購入資金に対する需要増加に伴って順調に伸びてきた。しかし不況期に入るとこれらの資金需要は急速に縮小し、貸付総額は1929年に140万ギルダーであったものが1935年には30万ギルダーへと激減してしまった(注9)。一方、政庁の側においても、不況期に入って急増した返済不能に対処するため、貸付に際して債務者の返済能力を厳しくチェックするようになった。さらに1931年以降全ての未返済者の家庭を銀行職員が訪ずれて各債務者の経済状態を調査し、返済を催促するまでに至ったのである(注10)。こうした政庁の厳しい措置のため、返済能力が低下しつつあった多くの住民にとって公営銀行からの借り入れはますます困難になって

いった。これに対して住民の間から、政庁に頼らず自分たちで銀行を設立して信用に対する需要を少しでも満たそうとした注目すべき動きがあった。

1920年代の好況期に見られたような投資資金需要は大恐慌以後ほとんど消失したが、多くの商人は商売を存続させるための運転資金を必要としていたし、生活資金のための信用供与を望んでいた一般庶民も多数いた。これらの人々のために「インドネシア商人協会」(Himpunan Saudagar Indonesia)の西スマトラ支部は早くも1930年に「インドネシア銀行」(Bank Nasional Indonesia)をパダンに設立した。この銀行の設立には上記の経済的理由のほかに、設立の推進者たちの強い民族主義的感情が働いていた。彼らはオランダ人の管理・経営する銀行が金融界を支配している状態に強い不満を抱き、「インドネシア人」(注11)も銀行運営の能力があることを示そうとしていたのである。この意味で「インドネシア銀行」の設立者たちは台頭しつつあった民族ブルジョアジー(特に商人層)の経済的利益と政治的要求とを代弁していたといえよう。この銀行は一種の株式会社の形態をとり、設立資金1000ギルダーは数人の株式所有者によって払い込まれた(注12)。

銀行の運営は設立当初若干の困難を伴ったがやがて軌道に乗り、1934年にはかなりの利益をあげるまでになった(注13)。銀行の順調な発展をみて重役会は1935年以後パトゥサンカル、パヤクンプ、ソロクの三大商業中心地に次々と支店を開設していった(注14)。この発展の背景には株式所有者の急激な増加があり、1937年にその数は420人を教えていた(注15)。銀行の規模が拡大するにつれて貸出額は増加し、当初1000ギルダーの基金しかなかった「インドネシア銀行」は1936年度には2万3050ギルダー(注16)、1938年度にはブキティンギの本店

だけで4万2260ギルダも貸出していた^(注17)。「インドネシア銀行」の貸付額は政庁系の公立銀行のそれ(1930年代の年平均は100~150万ギルダ)にはるかに及ばなかったものの、この銀行が住民自身の手で設立・運営された事実は彼らの金融面での積極的な対応であったと評価できる。

(注1) Gonggrijp, G., *Schets Eener Economische Geschiedenis van Indonesië*, Haarlem, De Erven F. Bohn N. V., blz. 182-183.

(注2) *Verlag Padang 1930*, blz. 10.

(注3) *Verlag Padang 1930*, blz. 8-9.

(注4) この傾向は1935年末から顕著となったようである。Telegram from Resident of West Sumatra to Governor General, dd. 2 October 1935, in Mailrapport 1087/1935.

(注5) 1929年の未返済率は0.91%であったが1930年のそれは2%であった。*Vereeniging Volksbank Minangkabau 1930*, Fort de Kock, Drukkerij "Agam," 1931, blz. 5. これは「ミナンカバウ庶民銀行」の年次報告書である。

(注6) *Verlag Padang 1929*, blz. 9; *V. P. 1938*, blz. 14.

(注7) Lapre, E. G. A., "Memorie van Overgave," 1938, blz. 46.

(注8) 西スマトラにおける銀行制度の発達については拙稿「西スマトラにおける商業的農業発展の基礎条件」(『アジア研究』第24巻第3号 1977年10月) 58~67ページを参照されたい。

(注9) *Vereeniging Volksbank Minangkabau 1929*, Bijlage IX; Bruins, B. A., "Memorie van Overgave," 1935, the section of 'Volkscredietwezen,' not paginated.

(注10) *Vereeniging Volksbank Minangkabau 1931*, blz. 5; Lyon, J., "Memorie van Overgave," 1933, blz. 83.

(注11) 当時「インドネシア」という言葉自身が民族主義を象徴していた。なおこの銀行設立の中心人物 Anwar は「インドネシア国民党」のメンバーでもあった。Mailrapport 316x/1936, blz. 5.

(注12) Mailrapport 1250x/1939, blz. 22; Mailrapport 794x/1932, blz. 16. 西スマトラで住民自身によっ

て株式会社が設立されたのはこれが始めてではない。1910年代後半以後いくつかのゴム会社が創られた。"Coöperatie op Sumatra's Westkust," *Indisch Gids*, 1928, No. 2, blz. 636-640.

(注13) Mailrapport 607x/1935, blz. 4.

(注14) Mailrapport 1250x/1939, blz. 22.

(注15) Mailrapport 845x/1937, blz. 4.

(注16) Mailrapport 220x/1937, blz. 4.

(注17) Mailrapport 535x/1939, blz. 1. この年の総貸出額の数値は得られなかった。

II 食糧の増産

1. 米の増産

財産の処分や金融が住民の経済的困難をある程度緩和する効果はあったが、これらの対応だけでは不況によってもたらされた諸困難を克服することはとうてい不可能であった。とりわけ主食である米の不足は日々の生活に直結した深刻な問題であった。というのも、好況期にはコーヒー、ゴム、コプラ、その他作物の輸出収入で外部から米を輸入することはできたが、不況期に入ってこれらの収入が減少したため米の輸入が困難になってしまったからである。さらに、外部諸地域から多くのミナンカバウ人が帰ってきたことは西スマトラにおける食糧事情を一層悪化させた。このため、住民の主たる努力は食糧の確保、なにかんずく米の生産増加に向けられた。この点についてC・ギアーツは彼の代表的著作の一つ『農業インボリューション』の中で全く逆の議論を展開している。ギアーツはインドネシアの農業を生態学的にジャワを中心としたサワ(水田)農業と外島を中心としたスウィデン(焼畑移動耕作)農業との二つのタイプに分類し、西スマトラを後者の代表的地域として論じている。スフリーケ(B. Schrieke)がミナンカバウ人の中に出現した<経済精神>について触れた後

(註1)、ギアーツは次のように述べている。

1922年頃（インドネシア内においては）米の輸出の重要な部分は依然として西海岸州〔西スマトラ州——筆者〕全体から流れ込んでいた。〔しかし——筆者〕1930年までにココナツ、コーヒー、ゴムの栽培は、年間700トンもの米を輸入するまでに米作を背後に押しやっしまい、1938年までに3300トンを入力するようになった。したがって、ヨーロッパの資本主義と接触してわずか20年間のうちにミナンカバウのスウィデン農民は、1世紀以上も生存線ぎりぎりの水準で悪戦苦闘していたジャワのサワ農民が決して到達し得なかった境地、すなわち金銭的連鎖の中にしっかりと組み込まれた意欲的な商業民となったのである(註2)。

ここでギアーツが引用した資料によれば、700トンの米の輸入とは正確には1922～30年の年平均輸入超過分（この場合輸出入とは海外だけでなく城内貿易をも含む）であり、同様に3300トンとは1931～38年の年平均輸入超過量である(註3)。ギアーツは1922～30年の年平均輸入超過量よりも1931～38年のそれの方が多かったことを根拠に、全般的趨勢として1931～38年にココナツ、コーヒー、ゴムなどの輸出作物栽培が拡大し、その分だけ米作が背後に押しやられてしまったとの結論を引き出した。しかし1931～38年といえど不況の只中であり、この期間にギアーツの主張したようなことが起こったとは筆者には考えられない。以下にギアーツの所説およびその論拠を補足しつつもう少し実態に則して批判的に検討してみよう。

第1に、西スマトラ地方が1922年頃大量の米を輸出していたのは事実であるが、その大部分はギアーツが主張するように「中核地域」(高地中央部の水田地帯)からではなく、南部のコリンチ地方からもたらされた。コリンチ地方は有数の穀倉地帯であったが外部に搬出する道路がなかったために、

あるオランダ人の表現を借りると「100年もの間」米が地域内に蓄積されていた(註4)。1921年によくコリンチとパダンとを給ぶ「コリンチ道路」が完成して以降それまでこの地方に蓄積されていた米が一挙に市場に出回るようになった。そして1923年においてさえ西スマトラから輸出された米の半分はコリンチ米であり(註5)、この傾向は1925年頃まで続いた(註6)。高地の中核地域からも特に1922～24年には多量の米が輸出されていたことは確かである。しかしそれは、1922～24年が第1次大戦後の不況期であり、当時米は容易に販路を見出すことのできた、ほとんど唯一の商品作物であったからである(註7)。このため、蓄積されていたコリンチ米がほぼ輸出し尽され、ココナツ、コーヒー、ゴムの方が利益の多い商品作物となった1926年以降、西スマトラの米の貿易は徐々に輸出超過から輸入超過へ転じていったのである(註8)。

第2に、ギアーツは1931～38年に米の輸入量が増加したことをこの期間に輸出作物栽培が拡大したことの唯一の論理的根拠としているが、両者の間に常に因果関係が存在するわけではない。米の輸入はその不作や凶作によっても増加するのである。西スマトラ地方は1922～30年には一度も特筆すべき米の不作に見舞われなかったが、1931年以降には1934/35年と1938/39年の二度旱魃による深刻な不作に見舞われた。1934/35年の不作時には灌漑水田で平年作の80%、天水依存の水田で60%しか収穫できなかった(註9)。また1938/39年の不作は、被害の程度は正確には分からないが、西スマトラだけでなくパレンバン、ジャワ、小スンダ列島などの米作地帯全域を襲った一層深刻なものであった(註10)。西スマトラでも特に旱魃の被害の大きかったパリアマン地区では、住民の主張によれば稲の75%が収穫不能となってしまい、この地方

第11表 西スマトラ州の米の貿易：1927～1938年

(単位：トン)

年 度	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
輸 入	7,276	8,681	6,718	3,175	4,200	880	242*	455	5,043	244	3,192	14,603
輸 出	1,480	1,919	1,770	1,173	773	275	137	76	114	159	344	167
バランス	-5,787	-6,762	-4,948	-2,002	-3,427	-605	-105	-374	-4,929	- 45	-2,848	-14,436

(出所) *Koloniaal Verslag 1928*, blz. 177-178; *K. V. 1929*, blz. 167-168; *K. V. 1930*, blz. 139-140; *Verslag Padang 1931*, blz. 67; *V. P. 1932*, blz. 55; *V. P. 1933*, blz. 67; *V. P. 1934*, blz. 54; *V. P. 1935*, blz. 51; *V. P. 1936*, blz. 45; *V. P. 1937*, blz. 50; *V. P. 1938*, blz. 43.

(注) ここでの米の貿易は海外および域内の全てを含む。

* なお、1933年度の輸入についてはこの年の前半の実績から筆者が推計したものと。

の多数の住民が飢餓に喘ぐ惨情を呈した。当時パリアマン地方の住民は一方で緊急に必要な食糧を購入する資金を政庁から借り入れ、他方で食糧事情を長期的に安定させるために甘藷やとうもろこしの栽培を拡大する努力を払った^(注11)。いずれにしても1934/35年および1938/39年の不作は西スマトラに米の大量輸入を余儀なくさせたのであった。

以上に述べた二度の不作を念頭に置いて西スマトラの米の輸出入をもう少し詳しく見てみよう。第11表は西スマトラの米の輸出入量とそのバランスを示している。ここで、米の貿易はいかなる年においても輸出と輸入が同時に生じていたことに注意すべきである。これは西スマトラ内部における米の自給事情の差に起因する。第11表から明らかのように西スマトラにおける米の輸入は1930年を境に大幅に減少した。そして1935年と1938年の不作が両年の大量輸入となって現われている。このことから、1931～38年の米の年平均輸入量が増加した原因が二度の不作であったことが分かる。米の年平均輸入量を1922年から1930年までを一区切りとして算出すると、1922～25年の特殊な事情による米の大量輸出によって、1927～30年(正しくは1927～29年とすべき)の大量輸入が相殺されてしまうので、全期間の年平均輸入量は著しく低い水準となって現われる。しかし、輸出作物栽培が

量的に最も拡大した1927～29年の状況とそれ以後の状況とを比較すれば、たとえ不作年の異常輸入分を入れても不況期に米の輸入が減少したことは第11表から明らかである。さらに不作時の例外的に多かった輸入を外して考えればこの傾向は一層はっきりする。ギアーツは二度の不作を全く無視しているかこれについて知らないまま二つの数値を比べて上記のごとき結論を下したことになる。米のように天候によって収穫が多大な影響を受ける作物を扱う場合、不作の有無は是非とも知らねばならない重要事項である。

第3に、ギアーツの論理そのものに弱点がある。すなわち彼は米の輸入増大は常に輸出作物栽培の拡大を反映するということを論証していないし、輸出作物栽培の拡大および米の生産縮小それ自体には全く触れていない。しかし、本稿第1部で検討したようにココナツ、コーヒー、ゴム栽培は1931～38年には事実として拡大しなかったのである。また米の生産は以下に論ずるように上記の期間に増大したのである。もしわれわれがミナンカバウ人の<経済精神>の発現を米作と輸出作物との関係で推論しようとするならば1922年から1938年までの期間を、(1)米を商品作物として増産、輸出していた1922～25年(ちなみに米作を常に自給経済の範疇として理解するギアーツの前提は誤まっている)、(2)米

作をある程度犠牲にしてココナツ、コーヒー、ゴムなどより利益のある輸出作物栽培を拡大した1926～29年、(3)大不況下で輸出作物価格の大暴落に直面して再び米の増産に集中した1930～38年、の三期に分けた方が有意義である。最後に、西スマトラは米作をそれほど犠牲にしなくとも輸出作物栽培を拡大し得る土地の余裕をもっていたこと、したがって西スマトラ農業を一括してスウィデン(焼畑移動耕作)農業と特徴づけるギアーツの前提は正しくないこと(註12)、の2点を指摘しておこう。次に不況期における米作の状況をみてみよう。

不況期に入って住民は一般に食糧の確保に主力を注ぐようになったが、この傾向は輸出作物栽培地域で特に顕著であった。1920年代には収入の大部分をココナツ栽培およびコプラ生産に依存していたパリアマン地区の人々は、コプラ価格の大暴落に直面して、以前には二次的な重要性しか与えられていなかった食糧、特に米の生産を農業の主体とするようになった。コーヒーとゴム栽培を行なうかたわら多くの出稼労働者を送り出していたルブ・シカピン地方では輸出作物価格の下落と出稼労働者の帰郷に対応して食糧の確保にせまられ、住民の関心が1930年代初頭から再び米作に向けられるようになった(註13)。住民は米の増産のために種々の方法を採用したが、ここではとりあえず灌漑施設の拡充、水田および稲作用畑地の拡大、耕作技術の改善、の3点に焦点をあてて検討しよう。これは、1930年代に米作を犠牲にして輸出作物栽培を拡大したというギアーツの主張に対する反証でもある。

米作にとって灌漑施設の有無は決定的とも言える重要性をもっている。不況期における農民の対応のうち灌漑施設の拡充は最も顕著な現象の一つであった。政庁の側においても1926/27年西スマ

トラ地方で起こった共産主義蜂起の直後に(註14)、恐らく十分な食糧の供給が秩序の安定を促進するとの配慮から、この地方の灌漑施設を拡充する方針を打ち出していた(註15)。しかし不況期に入ると政庁の節約政策のために実施された計画は非常にかぎられていた。この結果、たとえ政庁から技術者を派遣してもらうことはあっても、財政的な負担や必要な労働は住民自身が負うことが多かった。灌漑施設の拡充や米の増産を推進するにあたって慣習法首長(プンフル)たちが積極的にリーダーシップをとり、彼らの要請に応じても村民も進んで労働力を提供した。たとえばパヤクンプ地方の数カ村では慣習法首長の呼びかけに応じて村民が一致して「村落金庫」(註16)から必要な資財を購入し、技術者を雇う費用を支弁することに同意したり、自ら労働を提供するなど積極的な対応を示した(註17)。また既存の「村落金庫」の蓄積だけでは不十分な場合、村落会議の決定に基づいて新たに「灌漑税」を村民から徴収して灌漑事業を行なった村落もあった(註18)。パトゥサンカル地方のある村では慣習法首長が率先して必要な資金の一部を提供して村民に灌漑施設の充実を通じて米の増産を図るよう奨励した(註19)。慣習法首長たちが不況期に入って特に米作に関連してかかるリーダーシップをとり得たのは慣習法首長こそが母系大家族の共有する世襲財産(水田および恒常的に使用された耕地を含む)の守護者であり、これに対する影響力を行使し得たからである。また彼らは村落の共通利益のために村落会議を通じて村民に労働の提供を要求することができる立場にもあった。灌漑施設はしばしば数カ村の協力を必要とした。このような場合、政庁が工事全体を組織し監督することが多かったが、慣習法に基づいて特別な協力関係を結んでいた数カ村が協同で灌漑工事を行なうこ

ともあった^(注20)。政庁の技術的、行政的、財政的援助があったにしても、住民の側における灌漑施設拡充への積極的な努力は1930年代の注目すべき傾向であった^(注21)。

灌漑施設の拡充は既存の耕地における米の生産性を高めただけでなく、それまで米作が不可能であった土地を米作地に変えたから、これは事実上耕地の拡大をもたらしたのである。耕地面積の拡大が森林、荒蕪地を新たに切り開いて行なわれる場合も多かった^(注22)。たとえば州北東部のルンピオ村では1930年から1934年の間に300バウ（210ヘクタール）の森林が米作用に切り開かれた^(注23)。以上のほかに、コーヒー園やゴム園を陸稲用畑地や水田に転換した事例は枚挙にいとまがない^(注24)。ただし、これら米作用地に転換された土地はすでに地味が消耗してしまっている場合が多く、その生産性はあまり高くなかった^(注25)。また、大恐慌以前に放棄されていた水田や畑地で米作が再開されることも至る所で見られた^(注26)。こうした住民の努力の結果、実際に米作が行なわれた耕地面積の拡大と米の生産量増加は1931年頃から明確に認められるようになり^(注27)、その後もこの傾向は西スマトラ各地で続いたのである^(注28)。ただし耕地面積の測定が行なわれていなかった西スマトラの場合、正確にどれほどの耕地が拡大したかについての統計は得られない。さらに生産量についても、大恐慌以前に大雑把な生産量を推定（推定耕地面積にその地方の単位面積当たり平均収穫量をかけ合わせたもの）して以後この数値の修正が行なわれなかったもので、生産量の増減を統計的に示すことはできない。一方農民は増税を恐れて生産量の増加を政庁にほとんど報告しなかった^(注29)。いずれにしても不況期に入って耕地面積の増加に伴う生産量の増加があったことはこれまでの記述から充分証

明できる。次に、米作に関して不況期に現われた技術的改良、農耕形態の変化について述べよう。ただしこれらは主として政庁の指導のもとに進められた。

西スマトラの米作方法において生産性を高めるために是非とも改善されねばならない問題が少なくとも二つあった。一つは、収穫の時期をハリ・ラヤ（イスラム教の大祭の一つで毎年断食月^{ブレイク}明けに行なわれる）に合わせて耕作する慣行であった。ハリ・ラヤの時期は、モンスーン気候の雨期や乾期の自然サイクルとは必ずしも一致しないイスラム暦によって決められるので、ハリ・ラヤのために用いられた土地の収穫は一般に不安定で、しかも良くなかった。インドネシア諸地域の中でもとりわけイスラム教が浸透していた西スマトラにおいてこれは無視し得ない重要な問題であった。二つは、稲の播種や田植の時期が一定の小区域内においても時期的にばらばらであった点である。極端に言えば田植の済んだばかりの水田の隣りで稲刈をしているという状況は珍しくなかった。これは鼠によって荒される被害を著しく大きくしていた。なぜなら鼠の群は収穫期に入った稲田を次々と食い荒しながらその数を持続的に増加してゆることができるからである。このような場合鼠による被害は無視し得ないほど広がってしまう。不況期に入って米の増産が急務になると政庁はこれら二つの問題を解決するために、播種から収穫までの農作業とその適切な時期を記した農事カレンダーを作成して農民の間に普及させようとした。この農事カレンダーは一方で収穫時期をプアサに一致させようとする従来の慣行を改め、他方で同時的耕作によって少しでも鼠の被害を減らすことをねらいとしていた。農事カレンダーは西スマトラ各地に普及し^(注30)、ルブ・シカピン^(注31)やアラハ

ン・パンジャンなどこれまで米の生産性が低かった地方ではとりわけ大きな成果を納めた^(註32)。

米の増産努力は以上のほかにもさまざまな形で行なわれた。たとえばパイナン地方の農民のように成熟期間の短い稲の新品種を導入して二期作を行なうようになったこと^(註33)、堆肥や糞を焼いて作った灰を肥料として使うようになったことなどその良い例である^(註34)。

2. 野菜栽培の拡大

食糧生産の中でも主食である米の増産が最も急務であり、そのために大きな努力が払われたことはすでにみたごとくである。これに対して野菜の食糧全体に占める重要性は米ほど大きくはなかったが、野菜栽培の急速な拡大は米の増産に劣らず住民の不況に対する注目すべき対応であったと評価することができよう。野菜の中でも、とりわけキャベツと馬鈴薯の栽培は西スマトラ高地地方の比較的涼しい気候を利用して急速な拡大を示したのでこれら二つの野菜栽培について説明しよう。

キャベツは不況以前にも西スマトラで若干栽培されてはいたが、それが大規模に栽培されるようになったのは1930年代初頭以降のことであった。西スマトラの州政府は食糧事情を改善し、合わせて農家所得を増加させるためにキャベツを稲の収穫が済んだ田畑へ裏作として栽培すべく1930年代初頭に普及活動を開始した。政府はデモンストレーション農園を設けてキャベツがいかに有利作な

物であるかを住民に示した^(註35)。これは住民の間に大きな反響を呼び、キャベツ栽培はたちまちパティプ、スプル・コタ、ルブ・シカピン、アラハン・パンジャン地方に広まった^(註36)。こうして1930年末までには年間推定110万個^(註37)、1931年には400万個のキャベツが西スマトラ各地の市場へ出回るまでになったのである^(註38)。当初キャベツ栽培は州内の需要を満たすために栽培されたのであるが数年のうちにその供給量は需要量をはるかに上回わり、総生産量の50%がシンガポール、タパヌリ（西スマトラ州の北に隣接する州）、ベンカリス（スマトラ東海岸州の一部）などへ輸出されるようになった^(註39)。総生産量に占める輸出の割合は1936年には65%にまで上昇し、同年の輸出額は50万ギルダーであった。生産農家を得るキャベツ1個当たりの収入は5セントほどしかなかったが、従来存在しなかった収入機会が出現したという意味ではキャベツ栽培が生産農家にもたらした所得増加の貢献は大きかったのである^(註40)。

馬鈴薯の栽培も最初はキャベツの場合と同様に政府の普及活動によって始められた。その生産量は1933年には西スマトラ全土でわずかに80トンにすぎなかったが^(註41)1936年には1万トンへと飛躍的に増加した（第12表参照）。馬鈴薯の主産地もキャベツと同様涼しい高地地方、特にアラハン・パンジャンやムラピ山麓の丘陵地帯であった。アラハン・パンジャンの場合、標高1400メートルという高地にあって米作には不適であったため馬鈴薯はとりわけ魅力のある作物であった。住民は村の「市場基金」（村営の市場で課せられた慣行的な市場税を貯えたもの）で馬鈴薯栽培を拡大するために専任の農業指導員を雇うほど熱心であった^(註42)。馬鈴薯の栽培がキャベツの場合と同様食糧事情の改善に貢献しただけでなく生産者にとって有利な

第12表 西スマトラの野菜栽培：1936年

作物	作付面積 (H. A.)	生産高 (トン)	価額 (ギルダー)
キャベツ	2,484	290,000	780,000
馬鈴薯	2,500	10,000	440,000
からし	1,000	6,500	61,000
ネギ	650	3,000	362,000
計	6,634	279,000	1,643,000

(出所) *Verslag Padang 1936*, blz. 66.

所得機会でもあったことは米作との比較においてもいえる。米作の場合1バウ(約0.7ヘクタール)当たりの生産額はせいぜい125ギルダー(精米25ピクル×ピクル当たり平均市場価格5ギルダー)であったのに対し、馬鈴薯の場合米作よりはるかに投入される労働が少なくて同面積当たり120ギルダー(60ピクルの生産高で1ピクル当たり2ギルダー)もの所得をもたらしたのである。この有利さは米作に不向きな地域においては一層大きかった(注43)。

第12表に示されているように主要野菜4種だけで年間160万ギルダー以上の所得を生産者にもたらした。上記の野菜の他にも落花生、とうもろこし、玉葱、甘藷などの栽培が1930年代(注44)、特に1934/35年の米の不作を契機に(注45)急激な拡大を示した。ところで、野菜栽培は当初稲の裏作として導入されたが、その増産過程で住民は次第に野菜栽培の専用地を荒蕪地を開墾して広げるようになった。一部地域ではあまりに野菜栽培が広まったため1932年頃からは開墾すべき荒蕪地が稀少となってしまった(注46)。同じ頃西スマトラ各地で、政庁が水資源、材木資源を保護するという名目で住民の使用を禁じた保護林を農業用地として解放するよう住民が政庁に要求運動を起こしていた(注47)。住民のこの動きは野菜をも含む食糧増産への動きが当時かなり活発となり、それに対応して耕地の拡大が進行していたことを反映している。以上見たごとく、西スマトラにおける野菜栽培は内需を満たした後も拡大し続け、1930年代中頃までに野菜は自給用作物というよりもむしろ商品作物として栽培されるようになっていたのである。

(注1) Geertz, Clifford, *Agricultural Involvement: The Process of Ecological Change in Indonesia*, University of California Press, 6th printing, 1974, p. 120 において彼は Schrieke, B. J. O., *Indo-*

nesian Sociological Studies, Part I (The Hague and Bandung, van Hoeve, 1955) p. 99 から引用している。ここでスフリーケは1910年代および1920年代にミナンカバウ人の中に「マックス・ウェーバーやゾンバルトによって指摘された、ヨーロッパにおける初期資本主義に現われた精神革命と同様の精神革命が、すなわち「経済精神」が出現したのである」と述べている。したがって「経済精神」とはいわゆる資本主義精神を指すものと思われる。

(注2) Geertz, *op. cit.*, pp. 121-122.

(注3) ギアーツは Van de Koppel, C. “Eenige Statistisch Gegeven over de Landbouw in Oost Nederlandsch-Indië,” in van Hall, C. J. J. & C. van de Koppel ed., *De Landbouw in de Indisch Archipel*, van Hoeve, 's-Gravenhage, 1950, Vol. I, blz. 375 の表から引用している。

(注4) “Nota” of Agricultural Inspector, dd. Muara Bungo, 5 April 1919, in Mailrapport 1872/1919; Report of Van de Stok, “Nota over Kerintji Rijst,” Buitenzorg, 9 June 1919, in Mailrapport 1872/1919.

(注5) *Koloniaal Verslag 1924*, 's-Gravenhage, Algemeen Landsdrukkerij, 1925, blz. 196.

(注6) *Koloniaal Verslag 1925*, blz. 175-176; *Encyclopaedië van Nederlandsch-Indië*, Vol. 8, 's-Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1917, blz. 1959.

(注7) この問題については拙稿「西スマトラにおける商業的農業発展の基礎条件」54~55ページで論じてある。

(注8) 西スマトラにおける米の貿易は1926年にはほぼ輸出入収支がゼロとなり(同年の輸出1163トンに対して輸入は1150トンであった)、これ以後輸入超過に転じた。*Verslag Padang 1927*, blz. 21.

(注9) Schaufers, R. J., “Memorie van Overgave,” blz. 139; Morison, H. H., “Memorie van Overgave,” 1938, blz. 20.

(注10) Verbaal 14 August 1939, No. 24 にこれら地域の状況に関する報告がある。

(注11) Van Zanen, A. J., “Memorie van Overgave,” 1935, blz. 9-10; St. E. K. (asoemaratoe), “Loeboek Aloeng,” in *Oetoesan Alam Minangkabau*, 1939, No. 5, p. 72; Reports compiled in Mailrapport 423x/1939; Mailrapport 447/1939.

(注12) Cator, W. J., "Memorie van Overgave," 1934, blz. 8.

(注13) Stelma, H. J., "Memorie van Overgave," 1932, blz. 5-6.

(注14) 共産主義蜂起については拙稿「西スマトラにおける<共産主義>蜂起(1926~27)の社会経済史的背景——B. J. O. スフリーケの再検討——」(『東南アジア——歴史と文化——』Vol. 8 1979年4月) 47~72ページを参照。

(注15) *Rapport van Commissie van Onderzoek Ingesteld bij het Gouvernements-besluit van 13 February 1927, no. 1a*, Weltevreden, Landsdrukkerij, 1928, Vol. I, blz. 153; Vol. IV, blz. 27; "Register der Besluiten," Resident of West Sumatra, dd. 31 October 1927, No. 1432 in Mailrapport 3142/1928.

(注16) 「村落金庫」とは西スマトラ村落固有の村落財政制度で、村落が徴収する種々の慣行的徴収の一部を村落の公共財源として貯えたものである。詳しくは拙稿「西スマトラ村落の社会経済構造——土地制度史と村落財政」(『社会経済史学』第44巻第3号 1978年) 84~89ページ参照。

(注17) Van der A. R. Meulen, Ph. J., "Memorie van Overgave," 1931, blz. 43-45; Pothast, H. F. J., "Memorie van Overgave," 1930, blz. 5; Controleur of Alahan Panjang, "Economisch Memorie," Alahan Panjang, 18 September 1935, Korn Collection 367, blz. 18-19.

(注18) Deys, F. H., "Memorie van Overgave," 1934, blz. 11-12.

(注19) Schauer, "Memorie," blz. 105.

(注20) Ibid., blz. 104.

(注21) 不況期に西スマトラ全体でどれほどの灌漑施設が拡充されたかは分からないがリマフル・コタ分州については Meulen, "Memorie" blz. 41-45 に一覧表がある。

(注22) Lapre, "Memorie," blz. 30; *Verslag Padang 1931*, blz. 16; Morison, "Memorie," 1932, blz. 12.

(注23) Deys, "Memorie," blz. 12.

(注24) Ezerman, J. E. C., "Memorie van Overgave," 1935, blz. 7; Pauw, J., "Memorie van Overgave," 1932, bijlage II, blz. 11-13; Morison, "Memorie," blz. 11; *Verslag Padang 1931*, blz.

16; Pothast, "Memorie," blz. 12.

(注25) ゴム園を転換したバンキナンの例。Deys, "Memorie," blz. 13.

(注26) Kwantas, R. C., "Memorie van Overgave," 1936, blz. 15; *Verslag Padang 1934*, blz. 54; *V. P. 1935*, blz. 51.

(注27) *Verslag Padang 1933*, blz. 67.

(注28) Report of Resident of West Sumatra, dd. Padang, 20 October 1934 in Mailrapport 1394/1934; Neulen, "Memorie," blz. 39-40; Bruins, "Memorie," blz. 1-2; Ezerman, "Memorie," blz. 9; Schauer, "Memorie," blz. 105. See also note (23) above.

(注29) Schauer, "Memorie," blz. 105.

(注30) Lyon, "Memorie," blz. 66; Bouwman, H., "Memorie van Overgave," 1936, blz. 31-33; Pauwels, P. C., "Memorie van Overgave," 1936, blz. 12; Lapre, "Memorie," blz. 15-16; Deys, "Memorie," blz. 14.

(注31) Ezerman, "Memorie," blz. 8-9.

(注32) Hemsing, J. T. F., "Memorie van Overgave," 1938, blz. 4-5.

(注33) Lapre, "Memorie," blz. 27.

(注34) Schauer, "Memorie," blz. 138; Ezerman, "Memorie," blz. 8-9.

(注35) Lapre, "Memoie," blz. 13-14; Schauer, "Memorie," blz. 138.

(注36) *Verslag Padang 1930*, blz. 56-57; Morison, "Memorie," blz. 20; Pauwels, "Memorie," blz. 7.

(注37) *Verslag Padang 1930*, blz. 56-57.

(注38) *V. P. 1931*, blz. 70.

(注39) *V. P. 1936*, blz. 66.

(注40) Groeneveld, W., "Memorie van Overgave," 1931, blz. 9.

(注41) *Verslag Padang 1933*, blz. 93.

(注42) Lapre, "Memorie," blz. 7.

(注43) Schauer, "Memorie," blz. 140; Pothast, "Memorie," blz. 14-15.

(注44) Kwantas, R. C., "Memorie van Overgave," 1936, blz. 15; Schauer, "Memorie," 140-142.

(注45) Mendelaar, J. J., "Memorie van Overgave," 1935, blz. 11. 同様の報告はスマト州政庁の商

工部年次報告(1936年度版)にも見られ、そこではかかる傾向が1936年から顕著となったと述べられている。

(注46) “Economische Memorie van Alahan Panjang,” dd. Alahan Panjang 18 September 1935, in Korn Collection No. 367, blz. 1.

(注47) *Verslag Padang 1932*, blz. 76.

III ミナンカバウ商人の対応

1930年代の不況は輸出価格の暴落をもたらし、輸出作物栽培者たちに壊滅的な打撃を与えた。しかしこれら栽培者は最終的には食糧の増産という対応によって不況の影響を緩和させることができた。これに対して商人は、その経済行為の性質上農民のように自給部門に退くことはできない。したがって不況の影響は商人に対してより一層厳しく作用したに違いない。本節ではかかる困難な立場に追い込まれた商人たちがいかにその困難に対応したかを検討しよう。

ミナンカバウ商人は、営業資金の調達方法によって二つのグループに分かれた。一つは自己金融タイプの商人であり、地方の小さな市場で小規模の商業活動を営む商人の多く、一部の小売業者、少数の独立した大商人などがこのグループに属した。二つは、ヨーロッパ人輸入業者、公的金融機関、ミナンカバウ人の大商人や華僑などからの信用に依存していたタイプの商人で、これには卸売商人、仲介商人、小売業者の多くが含まれた。西スマトラにおける商業活動には総じて信用が大きな役割を演じていたといえよう。1920年代の好況期にはこれら金融関係はおおむね良好であった^(注1)。しかし、1929年の世界的規模の金融大恐慌は事態を一変させた。

大恐慌の勃発とそれに伴う深刻な不況はたちまち商業活動の縮小となって西スマトラ経済を襲った。自己金融タイプの商人は直ちに商業活動の規

模縮小を余儀なくされた。他からの信用に依存していた商人たちはさらに厳しい状況に直面した。商業取引が急速に縮小していく中で、卸売商人の信用に依存していた小売業者の段階で売れ行きが悪くなると、これは直ちに卸売商人の金融事情も悪化させた。というのは、卸売商人自身もしばしばヨーロッパ人輸入業者の信用に依存しており、後者への債務の返済が困難となったからである。ヨーロッパ人輸入業者の観点からすると、貸付金の回収に以前よりも多くの困難が予想される状況でさらに融資を続けることはきわめて危険であった。ヨーロッパ人輸入業者がミナンカバウ卸売商人に信用を供与する際、通常は何らかの担保(多くの場合母系大家族の世襲地)をとった。しかし、ミナンカバウ人債務者が破産してしまった場合ヨーロッパ人輸入業者は、たとえ法廷に持ち込んでも、慣習法によって永久譲渡が厳しく制限されている世襲地を取り上げることは事実上不可能に近いことを知っていた。したがって信用を供与していた輸入業者たちが現実的にとりうる防衛手段は信用供与を減らすことだけであった。事実、1930年には前年と比べてヨーロッパ人輸入業者からミナンカバウ卸売商人への信用供与額は一挙に3分の1へ激減してしまったのである^(注2)。また、本稿第I節で述べたように各種金融機関も未返済者を戸別訪問するほど貸付には慎重となっていたのである。こうして信用に依存していた商人の立場はますます困難となり、破産する商人が不況期に現われた。ただし、不況期にあっても新規に事業を始めたヨーロッパ人輸出業者が顧客やパートナーを得ようとした場合、相手が大きな卸売商人の場合には比較的容易に信用が与えられた^(注3)。

ところで、ミナンカバウ商人はなす術もなく不況の影響に翻弄されていただけではなかった。ミ

ナンカバウ商人の最も顕著な積極的対応は華僑商人との競争に勝つべく大きな努力を払ったことである。たとえばハラバン地方(高地北東部)では、それまで華僑商人が独占していたカンビアの取引をミナンカバウ商人が徐々に手中に収めていった(注4)。華僑商人との競争は、西スマトラにおける華僑商人の最大の拠点であったパダンにおいて最も激しかった。しかしここでもミナンカバウ商人は1934年頃から華僑商人に対抗するために現地での新聞で団結を呼びかけるなどの活動をしていた(注5)。この頃パダンを訪ずれたある日本人によれば、綿や人絹製品の販売はほとんど華僑商人を排してミナンカバウ商人の手中にあったようである(注6)。これはミナンカバウ人の努力がかなり成功したことを示唆している。ミナンカバウ商人の華僑商人への対抗は1938年には一層組織的な形で現われるようになった。この年「インドネシア商人協会」(Himpunan Saudagar Indonesia)のパダン支部に参加していたミナンカバウ商人は、華僑には決して商品を売らないという契約をミナンカバウ輸入業者と結んで華僑商人の影響力を排除しようとした(注7)。ミナンカバウ商人は華僑商人に対して攻撃的ともいえる態度をとったが、ヨーロッパ人商人には少なくとも表面的にはこのように攻撃的ではなかった。ミナンカバウ商人の態度にかかると異なる相異が生じたのは恐らく、華僑商人が彼らにとって日常的な競争相手であったのに対してヨーロッパ人商人(輸出入業者)はしばしば信用供与者であった、という事情によるのであろう。もっとも、不況期に入って有力なミナンカバウ商人たちが安い商品を買うために代表者をシンガポールへ派遣するようになったり(注8)、パカン・バル港へゴムを運ぶトラックに安い日本商品を積みこんで帰るようになったことなどは(注9)、ヨーロッパ人輸入業者

への依存から脱却しようとするミナンカバウ商人の努力の現われであったとみなすことができる。

ミナンカバウ商人が不況によっていかなる影響を受けたかを一般的に述べるのは困難であるが、これまでの記述に関連して次の点だけは指摘しておきたい。つまり、信用関係が破綻したことにより破産や営業規模の縮小を余儀なくされたのはとりわけ中小の商人層であったが、不況期にはかかる弱い立場の商人が少なからず淘汰されていった反面、一部の商人は一層優位な地歩を固めていたのでないだろうか。団結して華僑商人を排除することに成功したパダンの商人、シンガポールへ代表者を派遣した有力な商人、ゴムをパカン・バルに運んで安い日本商品を積み帰った商人——彼らはしばしばトラックの所有者でもあった——などはむしろ不況期に一層商業的地歩を強化した商人であったと思われる。しかし、この問題についてはさらに詳しい研究が必要であり、今後の課題としたい。

(注1) *Verslag Padang 1930*, blz. 6-7.

(注2) *V. P. 1930*, blz. 20; *V. P. 1931*, blz. 24-25. オランダ政庁は世襲地に関するかぎり西スマトラの慣習法を重視する態度をほぼ一貫して採り続けた。Cf: *Landraad Pariaman*, vonnis, 10 June 1929, in *Tijdschrift voor het Recht in Nederlandsch Indië*, Vol. 133, blz. 245-259.

(注3) *Verslag Padang 1930*, blz. 6-7.

(注4) “Politiek Polititioneel Overzicht voor Sumatra’s Westkust,” May 1937, in *Mailrapport* 490x/1937.

(注5) *Persamaan*, 8 October 1935, quoted in *Mailrapport* 1316x/1935.

(注6) 末広清信『宝庫スマトラ』京都 昭和17年 260ページ。

(注7) “Politiek Polititioneel Overzicht voor Sumatra’s Westkust,” January 1938, in *Mailrapport* 187x/1938.

(注8) *Ibid.*

(注9) *Deys*, “Memorie,” blz. 4.

IV 不況に対する社会的反応

これまでの記述は不況に対する住民の反応を経済領域に焦点をあてて検討してきた。ここでは本稿の締めくくりとして、住民の社会的および政治的反応を簡単にみてみよう。不況の影響がその深刻さを増した1931年、パリアマン地方の住民の間に「スワデシ」運動が起こり、たとえば「インドネシア産のタバコを吸おう」(rokok Indonesia)といったスローガンのもとにインドネシア製品の使用を呼びかけた^(注1)。ここで「インドネシア」とは言うまでもなく「蘭領東インド」に対置すべき言葉で民族主義的感情を現わしている。一方、不況下の経済的苦境の原因をオランダ植民政庁の政策に求める住民の声も高まった。「政庁の経済部はインドネシア人の利益を犠牲にしてヨーロッパ人資本家ばかり優遇している」といった現地新聞の論調はそのよい例である^(注2)。皮肉にも、政庁が1934年頃から現地産業育成のために導入した輸入制限措置——特に綿糸や綿布に対する——は住民の反感を買った。というのも、輸入制限は一方で現地の織物産業を刺激したが他方でその原料となる輸入綿糸や綿布の価格を高騰させてしまったからである^(注3)。また、政庁が1930年代の末から推進しようとしたインドネシアの工業化政策も住民の間で非常に不評であった。これは、政庁の推進しようとしていた工業化政策によって利益を得るのは実際にはオランダ人資本家だけであり、利潤や配当は国外に流れでてしまうのでインドネシア内部に残るのは苦力の賃金だけである^(注4)、というミナンカバウ人の批判の中に明瞭に示されている。

租税の重圧感是不況期に入って一層増大し、これに対する住民の反感も強くなった。この問題に

関する限り保守的な慣習法維持派の人々も、反オランダの立場に立つ政党グループやイスラム団体と同様政庁に批判的であった。保守派の理論的拠点であったある新聞は、政庁があまりに租税を過酷に取り立てるならば政庁と西スマトラ住民との関係は悪化するであろう。と脅迫にも似た政庁への警告を発していた^(注5)。租税に関連して注目すべき現象は、長い間外部にいたミナンカバウ人が故郷に帰ってきてても租税を逃れるためにそれを当局に報告しなかったことである。これも、不況下の経済苦に対する住民の一種の対応であったといえよう^(注6)。しかし、住民の反応が全て上に述べたような政庁への批判や租税からの逃避に終止したわけではなく、積極的に困難を乗り越えようとする動きももちろんあった。

慣習法首長たちは、経済こそがミナンカバウ世界の繁栄の最も重要な基礎であるとの観点から経済生活向上のためにあらゆる努力をするよう常に呼びかけていた^(注7)。彼らは、灌漑施設の拡充に際してそうであったように、一般住民の生活に対して積極的に指導力を発揮すべきであるとの自覚を強く持っていたようである^(注8)。慣習法首長たちとは別に生活の向上を図るべく啓蒙活動を行っていた人々がいた。教育関係者たちは不況を克服するためには農業や商業教育が重要であることを訴え続け^(注9)、中には自ら農業学校を設立した例さえある^(注10)。政庁も農業教育には力を入れ、既存の公立学校に農業コースを設けるなどの措置をとった。ミナンカバウ人教育者による啓蒙や政庁の新しい農業教育政策はかなり効を奏したようである。1930年代には農業コースに通う住民の数が増加し続けた^(注11)。所得が著しく減少した1930年代に授業料を出してまで農業コースに通う人の数が増加したのは、農業生産の拡大に意欲的に取

り組んでいた住民の積極的な態度を如実に物語っている。

(注1) “Politiek Polititioneel Overzicht voor Sumatra’s Westkust,” April 1932, in Mailrapport 236x/1932.

(注2) *Persamaan*, 2 November 1935, translated in Mailrapport 1355x/1935.

(注3) *Radio*, 13 March 1937, translated in Mailrapport 423x/1937.

(注4) *Sinar Soematra*, 24 May 1939, translated in Mailrapport 535x/1939.

(注5) *Oetoesan Alam Minangkabau*, 27 March 1939, No. 5, translated in Mailrapport 535x/1939.

(注6) Schauerfer, “Memorie,” blz. 129-130.

(注7) Batoeah, “Ekonomie dan Masjarakat,” *Oetoesan Alam Minangkabau*, 1939, No. 4, pp. 53-54.

(注8) *Berita Kerai* (西スマトラ州のクライ[Kerai]で発行されていた新聞), 1939, No. 9.

(注9) St. E. K. (asoemaratoe), “Kemadjoean dan Kekajaan” *Oetoesan Alam Minangkabau*, 1939, No. 4, p. 50.

(注10) Latif, S. M. dan M. Ilias, “*Perospectoes, Sekolah Economie Kayoe Tanam*,” Padang, 1936 はこれら教育者の理念を明確に示している。

(注11) *Verslag Padang 1930*, blz. 57; *V. P. 1931*, blz. 68; *V. P. 1932*, blz. 92; *V. P. 1935*, blz. 81; *V. P. 1936*, blz. 69; *V. P. 1937*, blz. 72.

結 論

本稿は1930年代の世界不況下の西スマトラ経済を、第1部「住民経済への影響」と第2部「不況に対する住民の反応」の二部に分けて検討したものである。第1部についてはその「結語」ですでに整理してあるので、ここでは不況が西スマトラ経済史に占める位置についてだけ補足しておきたい。西スマトラ経済史は18世紀末から19世紀初頭にかけて大きな転換をとげた。すなわち、この時期を境に、それまで米作を中心とした自給的経済を維持していた高地地方にもコーヒーその他の商

品作物栽培が広まった。これ以来、緩急の違いはあったにせよ西スマトラ経済は商業的農業化と貨幣経済化の方向に向って変化してきた。1910年代および1920年代は、ヨーロッパからの熱帯産物への需要増大に対応して上記の変化は一層進展した。このような背景を考えると、不況は輸出の不振や所得を減少させただけでなく、18世紀末以来進行していた交換経済への流れを大幅に止めてしまい、自給経済の方向へ引き戻す作用をしたことになる。不況期に続く日本軍政期は住民に米の備蓄および増産を強制したので、自給経済への復帰は一層強化された^(注1)。1930年代の不況に日本軍政期が続いたため西スマトラの代表的輸出作物栽培は壊滅的打撃を受け、独立以後今日にいたるまで二度とかつての栽培規模を回復していない。

住民は不況の影響を和らげるため、種々の対応を示した。その一つは、過去に金の保有という形式で蓄積した富を処分することであった。金の売却は確かに当座に必要な現金を入手する簡便な方法ではあった。しかしその反面この行為は、18世紀末以来商業的農業と交換経済が進行した過程で蓄積されてきた富が、資本として投資に向けられる代わりに、消費されてしまったことを意味する。詳しく見るならば、同様のことは他のインドネシア諸地域についても言えるのではないだろうか。この意味で1930年代の不況はインドネシアの住民に経済的困難をもたらすと同時に、交換経済への変化を一時的にせよ抑制したわけである。

食糧の増産は西スマトラ住民の不況に対する際立った対応であったが、かかる対応は彼らにとって初めての経験ではなかった。1914年から1918年の第一次世界大戦中および1921年から1923年の景気後退期に熱帯作物の輸出は激減した。この時西スマトラ農民は、不況期にあっても容易に市場を

見い出せる商品として米の大増産をして米が不足していた諸地域へ輸出した。本稿第1部の「序言」で触れたように、この時の収入が1924年から始まる熱帯作物の輸出ブームに即応して農園を拡大するための資本の一部となったのである。1930年代の不況期に生じた米の増産は、結果として大量の米を輸出するまでにはいたらなかった。これは以前と比べて西スマトラ経済の構造が1930年までに外部からの米の輸入に大きく依存するように変質してしまっており、一挙に米の余剰を生み出すまでに構造転換をはかることができなかったからであろう。しかし農民の間には過去の経験から、食糧は不況下の経済における最も有利な作物である、という観念が1930年代の食糧増産の背後に働いていたのではないだろうか。あるオランダ人は1938年の報告の中で、ミナンカバウ人は有利な作物への転換を機敏に行なう、と評したが^(注2)、それは、ギアーツが主張するように不況期に輸出作物栽培ではなく、食糧生産を拡大することを意味しているのである。食糧不足を補うべく栽培された野菜がまもなく有利な商品作物として輸出されるようになった事実はミナンカバウ人の先見性と環境への優れた適応能力をいかに現わしている。西スマトラ地方の場合、不況の影響は他の諸地域と比べてそれ程厳しくなかったようであるが^(注3)、その背後には上記のような対応が不況の厳しさを緩和していたのである。

終わりに、本稿の直接の課題ではないが、1930年代の不況と民族主義運動の発展との関係について触れておきたい。この時期の民族主義運動はしばしば経済の問題と切り離して扱われてきた。しかし本稿第2部IVでみたごとく、不況下の貧困化に起因する住民の生活不安が植民地体制への批判に向けられていたのであり、この批判が一つの背

景となって民族主義運動が広範な支持を獲得していた点を見逃してはならない。西スマトラの場合、事態はさらに複雑であった。つまり、州レベルの政治運動でみる限り主導権は種々の民族主義団体が掌握していたが、村落レベルでは民族主義団体は慣習法首長を中核とする保守派による、1920年代には見られなかった頑強な抵抗を受け、時には排除されることもあった。この新しい状況は次のような事情によると考えられる。灌漑施設の拡充や米作の拡大過程で見られたように、慣習法首長は母系大家族が共有する世襲地の管理人としての権限を基盤として経済社会領域での主導権を握った。この主導権はさらに政治領域にまで及び、西スマトラのいたる所で保守派の政治グループが1930年代に結成された。言い換えると、経済が世襲地を使用する米作中心の自給的構造へ戻るにしたがって、その管理人である慣習法首長の影響力は増大したのである。不況前に村を離れていた人びとが帰村すれば、通常世襲地の生産物である食糧は与えられたが、それは同時に慣習法首長の権限のもとに入ることをも意味したのである^(注4)。西スマトラに関する限り、以上のような複雑な過程を考慮に入れて民族主義運動の展開を研究する必要がある。

(注1) 筆者はこれについて、Akira Oki, "Social Change in the West Sumatran Village: 1908-1945," unpublished Ph. D. thesis, The Australian National University, 1977, Chapter 7 で詳しく論じてある。

(注2) Neeb, E. R. P., "Samenvattende Rapport der Handel in Bevolkingfokkie in de Geweesten Palembang, Lampongsche Districten, Bengkulen, Sumatra's Westkust ed Tapanuli," 1938, mimeograph, blz. 54.

(注3) *Verslag Padang 1937*, blz. 66.

(注4) 詳しくは、Oki, *op. cit.*, Chapter 6 参照。

(名古屋商科大学講師)